

公立世羅中央病院だより



百日咳の診断と治療

～成人と乳幼児の違いも覚えて～

公立世羅中央病院 診療部長 片岡 雅明

百日咳は、元来、乳幼児の疾患として知られています。国立感染症研究所での発生動向調査では、全国3000

か所の小児科からの報告に基づき、百日咳の発生状況の分析を行っています。しかし、最近では20歳以上の成人において増加が認められ、患者の半数以上を占めているとされ、注目されてきています。

百日咳とはどんな病気でしょうか？
百日咳はグラム陰性桿菌である百日咳菌 (*Bordetella pertussis*) によって引き起こされる気道感染症です。百日咳菌は、気道の上皮細胞に付着して百日咳毒素を産生し、その毒素が原因となって激しい咳を生じます。

典型的な症状
典型的な経過は、ワクチン未接種の乳幼児に多いと言われています。

①カタル期(感冒症状)：1～2週間

軽い咳から始まり、次第に通常の鎮咳剤では咳が改善せず、増悪してきます。この時期での診断は、家庭内で同じような咳をしている人がいる、という事以外では困難ですが、早めに抗菌薬による治療を開始すれば、咳症状の軽減に有効とされています。

②痙咳期(乾性咳嗽)：痰がからまない咳と発作性の咳嗽：4～8週間。

特徴的な咳が聴かれる様になります。これは、発作性の5～10回以上途切れなく続く連続的な咳込みで、狭くなった声門を吸気が通過する時に、笛音が聞かれます。咳発作は、夜間に強く、咳込みによる嘔吐、チアノーゼ(唇・爪が紫色になる)、無呼吸、顔面紅潮・眼瞼浮腫、結膜充血などを伴う場合もあります。

③回復期(1～2週間)
特有な咳が次第に減少してきます。

この時期に、上気道感染を併発すると、再び特有な咳が聴かれる事があります。

感冒や細菌感染症による咳が2～3週間で改善するのに対し、百日咳では、8週間以上も続く場合があります。

典型的な症状・成人

成人にみられる症状は、主に2週間以上長引く咳、夜間咳、連続性の咳発作です。しかし、成人では、症状が軽い場合が多く、医療機関を受診しない事もしばしば見られます。そのような場合、百日咳とは認識されず、乳幼児や周囲への感染源となつている危険性があります。乳幼児の百日咳で、感染源が判明した例では、母親が最も多く、次いで兄弟、父親、祖母の順となっています。

診断

14日以上続く咳に、①発作性の咳き込み、②吸気性笛声、③咳き込み後の嘔吐のいずれかが1つ以上がみられれば、臨床的には百日咳と診断されます。次に、喀痰培養や血液検査による百日咳の血清抗体価の上昇

を確認します。通常、血液検査は2回測定し、その差をみますが、抗体価が極めて高い場合には、1回で百日咳と診断されます。百日咳ワクチンの接種をされている方は、抗体価がやや高めに含まれるので注意が必要です。

治療

5～7日間の抗菌薬の内服で、百日咳菌は消失します。

咳については、典型的な咳が始める前であれば、抗菌療法による軽減効果が期待できますが、典型的な咳が始めてからでは、軽減効果は期待できません。しかし、いずれの期間でも、抗菌療法により、家族や乳幼児への感染を防ぐことが出来ます。

まとめ

百日咳は、百日も続く激しい咳、というイメージがあり、成人で軽症の場合には、医療機関を受診しない場合も多くみられます。この様な時には、家族や乳幼児への感染源となっている危険性があります。特に乳幼児をお持ちのご家庭では、長引く咳に注意し、早めにかかりつけ医にご相談下さい。